

馬場克昌『詩経物産図譜』について

岩 佐 伸 一

はじめに

本館では平成九年度に「花と鳥のイリュージョン——江戸の学問と芸術」と題した展覧会を行った。この展覧会では江戸後期になって盛んになった写真画系絵師の作品と博物図譜を同時に並べることににより、それぞれの立場の人々が花鳥をはじめとする自然物をどのように表現しようとしていたのかを示そうとした。そのうち後者の中心的存在として馬場克昌（註一）の仕事を取り上げた。その際には彼の手になる八件の図譜が出品されたが、その多くが実際に見たり育てたりしたであろう動植物を描き考察を加えたものであり、いずれの図譜も的確な描写がなされていた。それらのうち『詩経物産図譜』だけが文学作品を基盤にした、伝統的な本草学の色彩の濃い内容となっており、克昌の図譜中でも少々特異な存在である。以下はその『詩経物産図譜』についてその概要と若干の考察を示そうとするものである。

一 馬場克昌について

その生い立ち

克昌の生涯については、上野益三氏や佐々木利和氏が簡潔にまとめておられるが（註二）概略のみを簡単に述べておく。

江戸時代を通じて代々美濃国土岐郡釜戸村（現在の瑞浪市釜戸町）を中心に二千石を有した旗本馬場氏の十代目馬場大助は、名を克昌、字を仲達と称し別に資生、紫欄などと号した。天明五年（一七八五）に生まれ、一時幕府寄合医師の岡本家に養子に出されたものの再び馬場家に帰り、二十八歳の折

家督を相続した。小普請組、御小姓組などを経て御使番、御持筒頭、西丸留守居をつとめ文久二年（一八六二）に隠居、家督を長男昌之へ譲り、明治元年（一八六八）八十四歳で没した。その間には布衣を賜り、関八州・伊豆巡察を行い（註三）、江戸城にて乗馬の披露や將軍の日光参詣（註四）に付き従うなどの公務をこなしている。彼の経歴からすると二千石の旗本として太過無くその人生を送ったといえよう。

博物学における仕事

一方、博物学関係の事績も幾つかを確認することができる。一つは緒鞭会関係の事柄で、もう一つは自身の図譜作成についてである。

大名や旗本が中心となって構成された自然科学の研究会・緒鞭会においては、その発足の早い内から参加し、所蔵する天産物を提出し会の研究に資している。（註五）それらの研究結果として『秦皮図説』『砂援子 蟪蛄図説』『ホトトギス図説』などを緒鞭会の同人と共に完成させており、会を支えた中心の一人として良いと思う。

さてもう一方の自身の図譜作成についてであるが、現在のところ以下の十件が確認でき、それらのうち最も早いのが『群英譜』（天保十五年・東北大学付属図書館蔵）であり、海外産の植物を中心に収載している。花の概観だけではなく雄しべや雌しべなどの詳細についての拡大図が付されているところが注目される。続いて記したのが嘉永五年（一八五二）の序を持つ『群英類聚図譜』（杏雨書屋蔵）。七十八冊にも及ぶ大部な図譜である本書については佐々木利和氏が触れている。（註六）さらに嘉永七年（一八五四）には『資生圃草木未詳品図説』（国会図書館蔵）を著し、自らの花園にて育成した十種類の植物について克昌と交流のあった蘭方医・江馬春齡（元益・一七四七―一八三八）に質問した結果と考察を記している。この中には琉球や薩摩などからもたらされた植物も含まれており克昌の花園の豊かさとともに彼の

興味がどこにあったのかがうかがえる資料として貴重である。続いて安政二年（一八五五）の序を持つ『遠西舶上画譜』。主に海外産の植物をまとめた本書については上野益三氏や佐々木利和氏の論攷に詳しい。（註七）そして本稿で取り上げる『詩経物産図譜』（安政四年序・天猷寺蔵）が続く。このほか制作年は不明だが、『虫譜』『魚譜』『貝譜』（いずれも東京国立博物館蔵）がある。このうち『貝譜』は緒鞭会同人である武蔵石寿の『目八譜』などからの抄写というが（註八）、克昌の自然物に対する関心の幅広さが知られて興味深い資料といえよう。また元の形態は分からないが『博物館獣譜』（東京国立博物館蔵）のなかにも克昌制作の図譜の断片が約三十点ほど見られ、その中には「万延二辛酉年垂墨利加人持渡り於両国観場ニ出ルヲ真写ス」（虎図の条）とあるものもあり実際に見て記したものも含まれている。最後に『本草図譜』の写本（東京国立博物館蔵）が挙げられる。これは岩崎灌園の原著を写したものであるがところどころに「資生改出」という印が捺されており克昌が描き直している様子が知れる。

このように大助は複数の図譜を手がけたが、その多くの分量を占めるのが草木、特に花卉であり「花の資生圃」（註九）とされるのも妥当なことといえよう。

これまでの克昌に関する研究

戦前より克昌の名は博物学史関係の諸本には見られていたが（白井光太郎『本草百家伝』など）、具体的な資料の発掘や研究とかなり時代を下らなければなされていない。昭和五三年に発行された上野益三『日本博物学史散歩』には「十五 釜戸と東京」と題した一文が掲載されている。ここで氏は釜戸において馬場氏の跡を巡り、その菩提寺の天猷寺に蔵される『詩経物産図譜』についても触れている。また東京での克昌邸の跡を巡り、国会図書館に蔵される『舶上画譜』を克昌のものと比定された。（註十）本書は克昌

の存在を再認識させ、その生い立ちや事績、資料の発掘などを行ない、活字化した点に於いて克昌研究の出発点と位置づけても良いのではないかと思う。氏はその後も「遠西舶上畫譜」（註十一）を発表され、江馬春齡（元益）との交流を示す新資料を提示して事績の発掘に努められた。一方昭和六一年には佐々木利和「馬場大助」（註十二）が発表された。ここでは簡潔に克昌の事績がまとめられ、『魚譜』の存在も明らかにされており注目される。またそれまで具体的に語られることのなかった『群英類聚図譜』や『遠西舶上画譜』についてその大略を示し、克昌の代表的著作の概要が初めて明らかにされた一文といえよう。その後佐々木氏は「博物館書目誌稿——帝室本部博物書篇——」（註十三）において『遠西舶上画譜』の細目を提示された。この論文により克昌が海外産の植物に強く惹かれていたことが一層明らかになる。また緒鞭会の一員としての克昌を位置づけるに重要な研究として平野滴「天保期の本草研究会「緒鞭会」——前史と成立事情および活動の実態——」（註十四）が挙げられよう。それまで克昌が緒鞭会の同人であったことは周知の事実であったが、緒鞭会自体がどのような活動を行っていたかの詳細は明らかにされていなかった。氏の論攷では、その活動を残された資料から探り、活動日時や内容、参加者などを示され、これにより克昌の緒鞭会への関わり方の一端が明らかになった。他にも克昌の名が見られるものはあるが、緒鞭会の一員として名を挙げる程度であり個人の業績に言及した論述は見られない。

このように現段階では、残された図譜や経歴をうかがわせる少しの資料（註十五）以外には克昌の姿をうかがうものは発見されていない。また図譜もすべてが自筆稿本であり、その細目が明らかにされているのは『遠西舶上画譜』一書に留まっているのが現状である。

二 『詩経物産図譜』について

江戸時代の本草学と『詩経』

江戸時代を通じて日本の本草学は中国の影響下にあったことは間違いないだろう。その一つの現れとして中国の本草書に見られる天産物の名が日本の何に当たるのかを同定する作業が江戸時代初期の本草学界の主要な仕事のひとつであった。このような背景をもとに『詩経』に見られる天産物の同定作業も盛んに行われていた。

『国書総目録』（註十六）には三十タイトルを超える詩経に関する本草書が掲載されている。それらの内で成立年が明らかなのものの最も早いのが稻生若水の『詩経小識』であり跋文により宝永六年（一七〇九）の成立と見られる。これ以降ある程度流布したであろうと思われる詩経本草書では江村如圭『詩経名物弁解』（享保十六年成立）、淵在寛『陸氏草木鳥獸虫魚疏図解』（安永八年刊）、岡元鳳『毛詩品物図攷』（天明五年刊）、三谷樸・伊佐貞編『多識会品目』（寛政十一年刊）、茅原定『詩経名物集成』（文化五年刊）などが挙げられる。これらの書は、『詩経』を読む上で出てきた天産物を具体的にイメージするには大変役立ったであろうし、その参考書ともなり得たことは否定できない。しかし分量や考察の専門的な内容、それになによりも『詩経』に出てくる天産物に興味を集中させているところからは、『詩経』の参考書というよりは本草書と見たほうが的確であろうと思う。

また、対象にしている天産物の種類や数、解説の分量や詳細さは諸本によって大きな幅があるが、管見の限りでは、必ずしも薬用に使える物だけを取り上げている気配はない。この点からは、本草学本来の使命である薬用品を探索するという方向性とは一線を画していることがうかがえる。江戸時代の本草学が薬用の天産物のみを対象にしていたのではなく、より幅広くより多くの天産物の存在を知り、それがどのような物であることを確認し集成する学問になりつつあることを示す端的な例ではないかと考える。

他に写本ではあるが高名な本草学者の詩経本草書を挙げるとすれば、松岡恕庵『詩経名物考』、小野蘭山『詩経群類講義』、山本亡羊『詩経名物釈義』、畔田翠山『詩経名物弁解記聞』、小野職孝『詩経草木解』などがある。克昌の『詩経物産図譜』もこのような系譜の中に位置づけられるものである。

『詩経物産図譜』の概要

馬場家菩提寺のひとつである岐阜県瑞浪市の天猷寺に所蔵される『詩経物産図譜』は、全五冊からなる克昌自筆の稿本である。

縦二十六・三、横十八・七センチメートル。袋綴。総紙数二百四十六丁。

自序中においては「詩経品物図説」と称している。外題は金色紙の題簽に著者の自筆で「詩経物産図譜」と記されており本稿ではこちらを採った。

四周単辺、「資生圃蔵」の柱書きのある用箋に着色。薄墨色の間紙が綴じ込まれており背面の映り避け、着色画を浮き立たせている。

著者は浜田正徳の跋文に「従五位下筑前牧馬資生君之著」とあるところから馬場克昌（号資生）でその自筆稿本といえよう。同じく跋文に「安政丁巳季冬」とあり安政四年（一八五七）の完成と知れる。

第一冊目草部は自序二丁と本文四十四丁の計四十六丁、第二冊目は草部の本文が三十八丁、第三冊目が木部の本文四十九丁、第四冊目が鳥獸部の本文六十六丁、第五冊目が蟲魚部で本文が四十五丁と跋文二丁の計四十七丁からなっている。

その細目は別表の通りであるが、題の通り『詩経』に出てくる動植物を勘考し、絵画化した書物である。

本文の構成は、冒頭に動植物名を含む詩経の一句を抄出し、続いて該当すると考えた動植物名の和名やラテン名、オランダ名などを記す。さらにその動植物の生態や産地、品種、先人の考証結果、方言など関連する事項を書き連ねている。その後に当該動植物が図示される。

『毛詩品物図攷』と『詩経物産図譜』

先述のように江戸時代を通じて多くの本草家に採り上げられた『詩経』だが、時代が下るほど前の時代の結果を取り入れるなどの影響が見られる。その顕著な例が配列の順である。

克昌の『詩経物産図譜』の部立ては草部、木部、鳥獸部、虫魚部と並んでおり、おおよそ各部内の天産物の配列は詩の順になっている。(註十七) 先述した多くの詩経本草書を配列順に整理すると大きく二つに分かれる。ひとつは出てくる天産物を分類せずに出てきた順に並べ解釈していくもの。『多識会品目』、『詩経産物解』など) もう一つは出てきたものをまずは形態で分類し各部内で出てきた順に解釈していく配列をとるもの。『詩経小識』、『詩経名物集成』など) 克昌の『詩経物産図譜』は後者に入るが、中でも岡元鳳の『毛詩品物図攷』と類似の点が多く見られる。以下元鳳の著作との相違点を見てみよう。

まず一つ目に配列の順。『毛詩品物図攷』では卷一草部、卷二草部、卷三木部、卷四鳥部、卷五獸部、卷六虫部、卷七魚部となっており、各部内は詩の順に出てきたものを解説している。克昌は鳥獸、虫魚とまとめてはいるが順は同じであり、部内の配列順も同様である。

また採り上げる詩句の数もかなり近似している。

	『詩経物産図譜』	『毛詩品物図攷』
草類	八十九句	九十三句
木類	五十四句	五十七句
鳥類	三十九句	四十一句
獸類	二十六句	二十六句
虫類	二十三句	二十三句
魚類	十六句	十六句

特に獸、虫、魚類においては全く同じ数となっている。草、木、鳥類においても他の詩句にも天産物の名が見えるにもかかわらず、ほぼ同数の詩句となっているところからは双方の書物が深い関係にあると見ることができよう。

次に本文の構成。『毛詩品物図攷』ではまず詩経の一句が記され、当該天産物の和名が続く。その後、主に漢籍と照らし合わせてそれが何であるかを説き図を載せている。先述の通り克昌の本も同様の構成を採っている。

さらに解説に引用している文言や文献が類似していることも挙げられよう。例えば「匪兕匪虎」の条では双方とも『典籍便覧』を引用し、「臺發五兕」でも書き出しは双方とも同じである。また詩の一句を引きながらも先にその動植物が出ている場合に「ノ条二出ル」としている箇所も双方かなりの部分が重なっている。このように内容や出典が同じである箇所は相当数確認できる。事実克昌は本文解説内において「浪華ノ岡元鳳ガ撰ル毛詩品物図攷二(後略)」「(被采蕭令)の条」と記しており『毛詩品物図攷』を参考にしていたことは間違いない。前述のように配列順や本文の構成、表現の仕方や引用文献までも類似する点が多く、克昌の『詩経物産図譜』は『毛詩品物図攷』を下敷きに成立したと考えることができるのではないだろうか。

しかし全てが『毛詩品物図攷』と同じというわけではない。当てはめられた和名は双方で違うことも多く、本文の解説中には小野蘭山『詩経名物弁解』と似たような記述もある。また解説のほとんどを『伝』や『集伝』に依っている元鳳とは違い、克昌は漢籍はもとより『大和本草』や桂川国瑞、栗本丹州らの説を引用している箇所もあり広く和漢に文献を求め、克昌と同時代の考証成果を取り込み、さらに自己の知識を交えた記述を行っている。また、特に草部に顕著であるが方言や生育の様子、食品としての加工法など日本における情報を解説中に多く盛り込んでおり克昌なりの展開も見せている。さらに「羅甸」(ラテン)「和蘭」(オランダ)の名称を書き込んであるところ

も克昌独自の方向性が見られ注目される点と考える。

絵画面から見た『詩経物産図譜』

『詩経物産図譜』の構成が『毛詩品物図攷』に類似していることを述べたが絵の方はどうか。一見しても後者は版本という制約もあつてか稚拙な図であり、克昌がそれを写したとは言えないだろう。

木部「其糜其柘」の条に「末々真物ヲ見サレハ爰ニ図略ス」とあるように実際に見たものでなければ描かないという姿勢が知られる。事実、自邸内に花園を設け様々な植物の栽培に取り組んでいただけあつてかなり細かく描かれる植物が多く、「隅有六駁」の条に描かれるムクエノキ(図一)は、枝や葉だけでなく雄花や雌花まで細やかに描いている。他にも花や実をクローズアップして描いている箇所(図二)も多く草部と木部の内ではかなりの割合で実見したものを描いたのではないかと思われる。

これに対して鳥獸部では少々違う事情が見えてくる。

それは架空の生き物や当時はまだ渡来していなかった動物が描かれていることである。龍や鳳凰などは古来より絵画化されており決まった形が知られていたからそれに従つて描いたのであるが、興味深いことに麒麟に関しては空想上の靈獣である麒麟を描くのではなく、いわゆるジラフを描いている(図三)。その解説は桂川国瑞の説をそのまま引用し、絵も同じくその資料(註十八・図四)と同様に描かれている。また「干嗟乎騶虞」に見られる騶虞(スウグ)の図(図五)についても他書に同じ図(図六)が見られる。それは高木春山の『本草図説』(西尾市岩瀬文庫蔵)であるが、この書の成立年が嘉永五年(一八五二)以前であるところから一見すると克昌が模写したように考えられるが、双方の交流を示す確証はなく、またそれ以前にオリジナルが存在したとも考えられ一概に克昌が春山の図を写したとはいえないであろう。いずれにしろ架空の動物を描かざるを得ないということに草部や

木部とは違つた克昌の姿勢を見ることができるとはならないだろうか。

また、対象の鳥獸以外にも背景が描かれ(図七)、博物図というよりは美術絵画的な印象を受ける。特に配された花卉樹木にも主対象のものと同じくらいの力を注いでおり、ある対象物に関してどの部分も同じ注目度で描こうとする博物画の手法には則っているのだが、この場合は主対象以外のものまでも描写の対象としており、主な対象物そのものよりも、ある対象物を主にした「情景」を描くことを意識していたのではないかと考えられのである。ここに博物図譜としては少々違和感を覚える要因のひとつがあるのではないかと思う。このように近景を中心とした情景の中にある主要な解説対象物を据えるような描き方は、本図譜においては鳥獸部および虫魚部のうちの虫部に見られることである。

また、『毛詩品物図攷』に比べて格段に図が細やかになっており、解だけではなく図を充実させることにより、それまでの名物学的本草学のような効能や食用の可否を論じた書物から、対象物そのものの「かたち」を探求することに重きを置いた博物図譜の姿へ『詩経』を化身させたところに本書の新しいさを見いだしたいと思う。

以上『詩経物産図譜』の絵について特徴的な箇所を挙げたが、他の克昌の図譜の多くが実際の観察からなっていることを考えると、本書は他からのコピーが入っている点、少々趣を異にするといえよう。

おわりに

馬場克昌の『詩経物産図譜』に関してその概要と若干の考えを述べた。およそ現段階では岡元鳳『毛詩品物図攷』に類似した点が多く見いだされる所からそれを下敷きに成立したと考えるに至った。しかしそこには克昌特有の知識や表現が盛り込まれておりすぐには下敷きがあることを感じさせない。

この図譜が克昌の博物学の仕事においてどのような位置にあるのかはその全貌が明らかになっていない現在確実なことは言えないが、伝統的な本草学の手法に則りながらもラテン語やオランダ語などを附記するなど先進的な面も見られることはすでに指摘したとおりである。今後は本図譜が科学的にどこまで評価されるのか、動物学や植物学方面の専門家の研究を待ちたい。

註

- 一 馬場克昌（字仲達・号資生・通称大助）の名前については従来「大助」が多く用いられてきたが、馬場家では代々通称として「大助」を名乗っており個人を特定するのが難しい。本稿では馬場家十代目の馬場大助克昌であることをはっきりとさせる目的で名の克昌を用いた。
- 二 上野益三「金戸と東京」『博物学史散歩』八坂書房 昭和五十三年）
佐々木利和「馬場大助」『彩色江戸博物学集成』平凡社 平成六年）
「関八州伊豆巡察日録」（天猷寺蔵）に詳しい。
- 四 「日光御宮御参詣 供奉御役人附」に見える。（天保十四年刊）
もともと緒鞭会発足以前から「物産会」と称した会に出入りし、前田利保らと交流していたさまが「動物図譜」（富山市郷土博物館蔵）からうかがえる。
- 五 佐々木前掲書
- 六 上野益三「遠西船上画譜」（忘れられた博物学）八坂書房 昭和六十二年）および佐々木前掲書
- 七 磯野直秀「江戸時代介類書考」（慶應義塾大学日吉紀要・自然科学）No 一一〇）
佐々木前掲書
- 八 本書は後に佐々木利和氏によって克昌著かどうか疑問が出された。（佐々木前掲書）
- 九 上野前掲書
- 十 佐々木前掲書
- 十一 「駿台史学」第九十八号 平成八年九月
- 十二 「柳宮補任」および江戸幕府に提出された経歴書。後者は「明細短冊」と呼ばれ、『江戸幕臣事典』（新人物往来社 平成二年）にまとめられている。
- 十三 岩波書店刊 昭和五十二年―五十三年 第二刷版による。
- 十四 鳥獸部の内の一部に不整合が見られる。

十八 桂川国瑞賛「麒麟図」（個人蔵）

末尾になりましたが本稿をなすに当たり『詩経物産図譜』のご所蔵者・天猷寺の馬場宗信師には大変お世話になりました。また、本館人文係長の長嶋俊之氏には資料の筆写などご協力いただきました。資料閲覧と写真に関しては藪本莊五郎氏、西尾市立岩瀬文庫のお世話になりました。記して謝意を申し上げます。

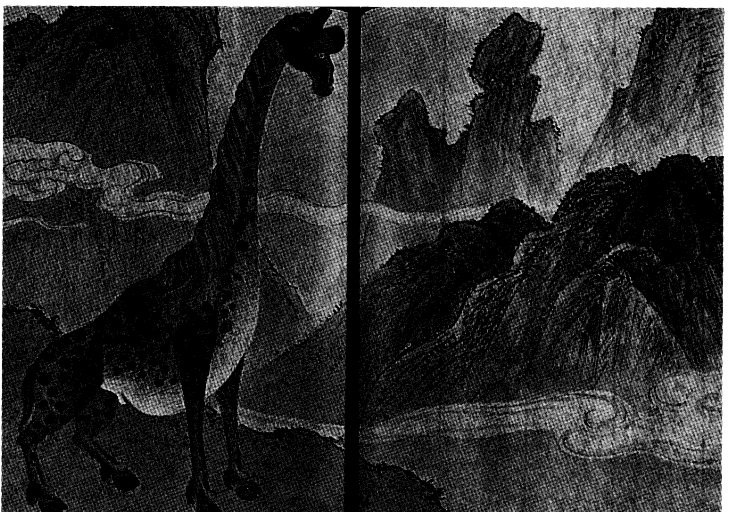
図一
『詩経物産図譜』 木部よりムクエノキの部分



図二
『詩経物産図譜』 木部よりニレザクラの部分

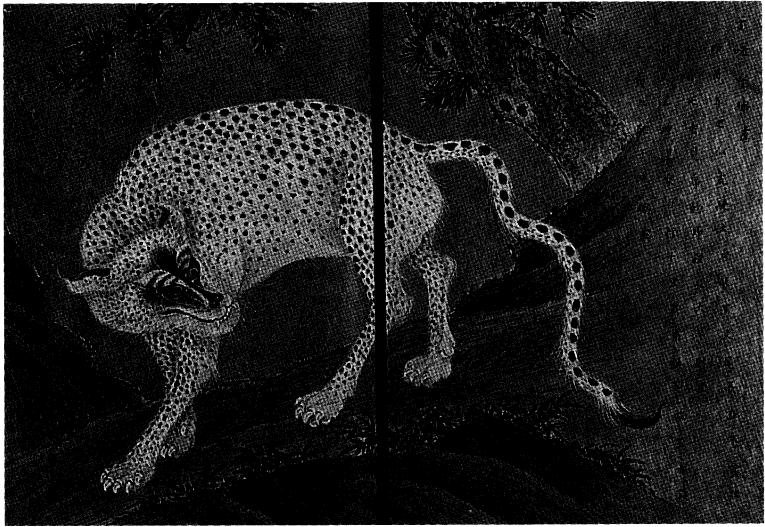


図三
『詩経物産図譜』 禽獣部よりキリンの部分



図四
桂川国瑞賛「麒麟図」

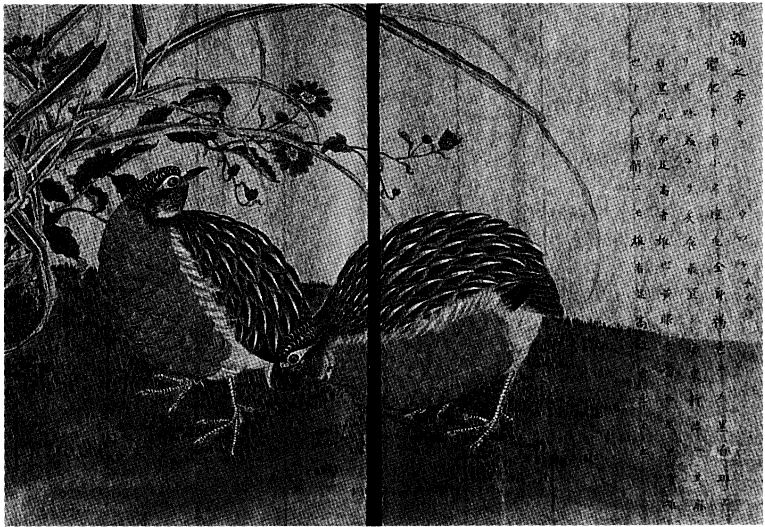




図五 『詩経物産図譜』禽獣部より驕虞の部分



図六 高木春山『本草図説』より驕虞の部分
西尾市岩瀬文庫所蔵



図七 『詩経物産図譜』禽獣部よりウズラの部分

『詩経物産図譜』細目
巻1 草部

註：詩句の表記は『詩経・楚辞』（日加田誠訳 中国古典文学大系第15巻）によった。
番号は詩の句に振り付けた。一つの詩の句の中に複数の天産物が出て、それを個別に記している場合は枝番号を付加した。

番号	詩句	大助勘考植物名（一）内は割注を示す	備考（原則原文のままとした）
1	參差荇菜	アサヰ〔和名鈔〕 ヒルラルシア〔羅句〕 蘅〔正字通〕 澤葵〔傍覽集解〕 金蓮兒〔救荒本草〕 細蕲〔鄒邪代醉〕 翠帶〔名物法言〕 萎餘〔埤雅〕 接餘〔説文〕	
2	葛之覃兮	クス マクス〔古歌〕 ドリコスヒルシイタス〔羅句〕 走梅根〔菜譜〕 𦵏葛〔鎮江府誌〕 葛藤根〔菜性奇方〕 絳絡草〔本草原始〕 ミ、ナ〔和名〕 カラスチユム〔羅句〕 ヲ、バコ〔延喜式〕 プランタコマヨル〔羅句〕 車錢子〔五福全書〕 烏足〔彙苑詳注〕 勝烏菜〔救荒本草〕 陵畧〔列子〕 望蕞菜〔青浦懸志〕 車過路草〔訓蒙字會〕 野甜菜〔簡便方〕 布伊作只〔鄉茶本草〕 鯽魚草〔世事通考〕 穿錢〔南寧府志〕	
3	采采卷耳	スマヨモキ	
4	采采芣苢	カワラハ、コ 〔一名〕アラレギク	
5	言刈其萑	ワラビ〔和名鈔〕 ヤマ子グサ〔古歌〕 プテリスアクユイリナ〔羅句〕 フロウイキハーンコロイト〔和蘭〕 蕨眞菜〔救荒本草〕 拳菜〔廣東新語〕 紫玉簪〔事林廣記〕	
6	于以采芣		
7	言采其蕨		

17	16	15	14	13	12	11	10	9 の1	9	8	
其甘如薺	誰謂荼苦	采芣采菲	匏有苦葉	彼茁者蓬	彼茁者葭	白茅包之	于以采藻	田字草	于以采蘋	言采其薇	
班菜〔函史〕	ナズナ〔和名〕 バチグサ〔古歌〕 薺采尼〔救荒野譜〕 公參菜〔古今医統〕	ニガナ ソクキユス〔羅句〕 ノルクウエイン〔荷蘭〕 ハーセンコールカンセチステル〔同上〕 苦苣菜〔救荒本草〕	ラゲナリア〔羅句〕 クユクユルヒダ 苦瓠〔釈名〕 苦瓠〔釈名〕 苦不老〔附方〕 ヒサゴ ヒヨウタン	草字草〔訓蒙字會〕 コウライキク	蘆 蒲蘆〔琅邪代醉〕 萃〔尔雅〕 萃〔通雅〕	茅柴〔品字箋〕 ヨシアシ〔和名鈔〕 ヒムロクサ〔古歌〕	チカヤ チ〔和名鈔〕 ヲモイグサ〔古歌〕 サツカルユムスビカチユム〔羅句〕 過山竜〔本草義筌〕 茅草〔訓蒙家會〕	〔釋名〕	ドウカタノカミミ	筆管菜〔山東通志〕 迷陽〔詩經朱傳〕 紫纂〔授時通考〕 ラヌミユンダヤホニカ〔羅句〕 ゼンマイ	鼈脚菜〔毛詩物図説〕 根鶏〔事物鴻珠〕

32	31	30 の 1	30	29	28	27	26	25	24 の 3	24 の 2	24 の 1	24	23	22	21	20	19	18	
彼采蕭兮	中谷有稚	稷	彼黍離々彼稷之穗	焉得諼草	一葦杭之	芄蘭之支	葭莖揭揭	齒如瓠犀	蕭竹	王芻	竹	綠竹猗猗	言采其蟲	爰采芣矣	爰采唐矣	牆有茨	自牧歸黃	隰有苓	
ガルリウム ヘルユム〔羅句〕 ウァルスローー〔和蘭〕 ヲフフレクト ウルストロト〔和蘭〕	カハラマツバ 透骨草〔救荒本草〕 ハンセリナシビリカ〔羅句〕 メハジキ	ウルシキビ	マキビ〔大和本草〕 ホルクユス ソルグユム〔羅句〕	ヘメロカルリスヒユル〔羅句〕 モチキヒ	葭ノ條ニ見ユ ワスレグサ〔延喜式〕				〔秋名〕 蕭竹	カリヤス	マダケ	タルケ〔通名〕 アルユンドバムブース〔羅句〕	ハ、クリ〔延喜式〕 ハ、グサ〔古歌〕 ハルユリ〔種耕家〕 フリチルテリアメラアグリ〔羅句〕 タケ〔通名〕	ムギ	金絲藤〔揚州府志〕 クユスクユタエユロバアー〔羅句〕 キユスキユタ〔和蘭〕	子ナシグサ〔本草和名〕 シリビユルユステルレストリス〔羅句〕 シロヒシ〔古名〕	ハマビシ〔和名〕	那耳〔郷采本草〕 カッブルセルラビユルサ〔羅句〕 ユルサテスケンスコロイト〔和蘭〕	
							葭ノ條ニ見ユ	瓠瓠ノ條ニ見ユ	蕭竹 ウシクサ〔和名鈔〕 ニハヤナギ									説區ニノ辨セス	

44	43 の1 梁	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33 の1	33
敬蔓于野		不能藝稻梁	言采其實	言采其莫	維秀驕驕	贈之以勺藥	方秉蘭兮	茹蘆在阪	隰有游龍	隰有荷華	丘中有麻	伊吹ヨモギ	彼采芣兮
ヒサゴツル ヤブカラシ ヒチス ヤボニカ〔羅句〕	ヒサゴツル〔和名鈔〕 シ、クハズ	モチノヨ子〔和名鈔〕 モチゴメ ヲレイサ サチバ〔羅句〕	スギナ エクコイセチユムアルヘンセ〔羅句〕		エノコグサ〔和名鈔〕 バニクユム〔羅句〕	エビスグサ〔和名鈔〕 エビスグサ〔延喜式〕 プーラニア アルビフロフ〔羅句〕	エウバトリウム シ子シセ〔羅句〕	フヂハカマ〔古歌〕 エウバトリウム シ子シセ〔羅句〕	アカ子 キユエリア トリコトマ〔羅句〕 ハルトホルミケ カラツヘ〔和蘭〕	オマケダデ ボレイゴニユムヲリインダレ〔羅句〕	子ユムビウム スペシヲシユム〔羅句〕 ハス	アサ〔和名鈔〕 ヲ〔同上〕 カンナビス サチハ〔羅句〕	サシモクサ ヨモギ アルテミシア アブシンナユム〔羅句〕

77の3	77の2	77の1	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
馬先高	馬先高	牡蒿	匪莪伊蔚	下莞上簟	言采其菑	言采其遽	無啄我粟	薄言采芣	菁菁者莪	北山有萊	南山有臺	甘瓠縈之	食野之芼	食野之高	食野之萃	果臝之實	獻羔祭韭	九月叔直	黍稷重穋
コシオガマ	キセワタ	ヲトコヨモギ アルテミシア ヤボニカ〔羅句〕	ツクモ〔和名鈔〕 フト井 ユンクユス ハル〔羅句〕	イホスキ〔延喜式〕 イラツキ〔和名鈔〕 ヤマゴボウ バイトラケア デクタントラ〔羅句〕	ギシギシ ルコメキシキシビユス〔和蘭〕	オランダチサ	キンコウライ シカキク	アカサ〔和名鈔〕 セノボヂウム リュブルユム〔羅句〕 ローデ ガンセフト〔和蘭〕	カサスゲ シキルブユス ムーロストク〔羅句〕	セイノドン〔羅句〕 カヤツリグサ ヒシハ	アルデミシヤ アプロタスユム〔羅句〕	レムナ ミノル〔羅句〕	トリコサンチユム〔羅句〕	キカラスウリ	アルリウム セ子スケンス〔羅句〕	ニラ コミラ〔和名鈔〕	アサノミ		
						辨解可從				前匏ノ條ニ出ル						俗名ニラ			

巻3 木部

95	94	93	92	91	90
唐様之華	林有樸楸	標有梅	蔽市甘棠	言刈其楚	桃之夭夭
ザイフリ ニレザクラ	コナラ クユエルクユス〔羅句〕	ウメ アルメニカ〔羅句〕	リンコナシ	ニンジンボク	モ、〔和名鈔〕 アメイグダルユス ベルシカ〔羅句〕
アロ 雄木 ドロノキ 雌木			東都花戸ミツバカイドウト云	此樹和産ナシ享保年中渡種渡リ	

89	88	87の1 牟	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78
薄采其萌	以嬌荼蓼		貽我來牟	維荀及蒲	藝之佳菽	萼余如飴	苕之華芸其黃矣	白華菅兮	終朝采藍	終朝采綠	言采其芹	葛與女蘿
ヌナハ ヒルラルシア	タデ	オ、ムギ〔和名鈔〕 ホルデウム ヘラスチコン〔羅句〕	コムギ〔和名鈔〕 トシコシムギ〔古歌〕 トリチクユム アースチヒユム〔羅句〕	タケノコ	ノラマメ〔和名鈔〕 エンドウ ビシユムサチヒユム〔羅句〕	ツホスミレ ヒヲラ ツホスミレ〔羅句〕	ノセウ〔和名鈔〕 ノウセン ヘグノニア ガランヂフロウ〔羅句〕	菅前条二出	ア井 タデア井〔和名鈔〕		セリ シロ子グサ〔藏王集〕 エツベ〔和蘭〕	サルヲガセ〔和名鈔〕 スユチバルバ〔和蘭〕
									享保年中唐山ヨリ二品ヲ渡ス	カリヤス前条二出		

107	106	105	104	103の1	103	102	101の3	101の2	101の1	101	100	99	98	97	96	
無折我樹杞 無折我樹檀	不流束蒲	投我以木桃 投我以木李	投我以木瓜	松	檜楫松舟	降觀于桑	漆	梓	桐	椅桐梓漆	樹之榛栗	山有榛	吹彼棘心	汎彼柏舟	華如桃李	
	カワヤナギ エノコロ柳 サリキス アルバ〔羅句〕		ボケ セイーニア〔羅句〕		ビヤクシン ユニベルユス ヒルキニカ〔羅句〕	クハ〔和名鈔〕 モルユス ニグラ〔羅句〕 ムールベシーン〔荷蘭〕	ウルシ〔和名鈔〕 ルユス フルニキユス〔羅句〕	ビクノニアカクルバ〔羅句〕 雷電キリ キサ、ケ アツサ〔本草和名〕	桐 ヒトハグサ〔古歌〕 ビクノニア トメントサ〔羅句〕 アツサ〔本草和名〕	イヌギリ イ、ギリ ケラノキ カラセンダン メリア〔羅句〕	カスタニア ヒスカ〔羅句〕	コナツメ サ子ブト〔和名鈔〕 シセイブユス〔羅句〕 ハシバミ〔和名鈔〕 コレイユルス アメリカナ〔羅句〕	チユヤ〔羅句〕	ブルニヌユス ドメスチカ〔羅句〕	スモ、 ヒノキ	
両品不詳			享保年中漢種渡リ										享保年中ニ漢種渡リ諸國ニ栽ユ			唐棣

130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108
楊柳依依	維常之華	常棣之華	集于苞杞	采荼薪樗	八月剥棗	鬱及薺	猗彼女桑	東門之枌	隰有樹檖	山有苞棣	隰有六駁	山有苞櫟	有條有梅	隰有楊	集于苞栩	有杕之杜	椒聊之實	隰有杻	隰有榆	山有樞	折柳樊圃	顏如舜華
		ニワサクラ	レイクユイム クコ	キツ子ノチャブクロ スタペイレア ヘテロバイルラ〔羅句〕	ラムヌユス ナツメ シセイフユス〔羅句〕	ニワムメ ブルユニユム〔羅句〕	イトクワ				ムクエノキ プリユヌユス アスベラ〔羅句〕				ハハソ クユエルクス ゲメルリフロウ〔羅句〕		サンセウ ハガラビベリタ〔羅句〕	子ツミモチ〔和名鈔〕 リグユストルユム ヤボニクユム〔羅句〕	アキニレ ユルミユス ヤボニカ〔羅句〕	ヤニレ〔和名鈔〕 ハルニレ ユルミユス〔羅句〕	シタレヤナギ〔和名鈔〕 サリキス ヤボニカ〔羅句〕	ムクゲ アサカホ〔万葉集〕 ヒビスクニス セイリンクユス〔羅句〕
前条ニ出	前条ニワサクラ						榦ノ條ニ見ユ	榦未詳							杜赤棠也甘棠ニ見ユ							

157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144
鷄棲于桀	于嗟鳩兮無食桑葢	鶉之奔奔	鶉則離之	莫黑匪鳥	流離之子	離離鳴鴈	雄雉于飛	燕々于飛	誰謂雀無角	維鳩居之	維鵲有巢	黃鳥于飛	關關雎鳩
ニワトリ		ウヅラ〔和名鈔〕	ヒシクヒ	ヤマカラス	フクロウ〔和名鈔〕	カリ	キヌス〔和名鈔〕	ツバクラメ〔和名鈔〕	ス、メ	ハト	カササギ〔和名鈔〕	朝鮮ウクヒス	ミサゴ
	按ニ舶来ノチヨウシヤウバトナルベシ												

卷4
鳥獸部

143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131
梧桐生矣	其慝其柘	其檉其楮	其濯其栲	榛梣濟濟	柞棫拔矣	維柞之枝	葛藟荒荒	隰有杞桋	其下維穀	北山有楸	南山有栲	南山有杞
アラギリ ステルクチア トメンドサ〔羅甸〕		ギヨリウ タマリキス シ子ンシス〔羅甸〕	サ、グリ〔大和本草〕			イヌツゲ	ヤドリキ ヒスクユムアルビユム〔羅甸〕		カヂ〔和名鈔〕 フロウス〔羅甸〕		ケンボナシ ホレニア シユルシユス〔羅甸〕	ヒイラギ
	未タ真物ヲ見サレハ爰ニ図略ス	檉和産ナシ百年前漢種渡リ今世ニ多シ	梣未詳									

188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166 の1	166	165	164	163	162	161	160	159	158
臺發五犯 臺發五縦	無使彪也吠	野有死麋	羔羊之皮	誰謂無牙	麟之趾	我馬虺隤	脊令在原	鸛鳴于垤	鸛鳴于垤	七月鳴鵙	鴈鳩在桑	維鵲在梁	鵲彼飛隼	肇允彼桃蟲	振鷺于飛	鳳凰于飛	鳧鷖在涇	時維鷹揚	有鷁在梁	有集維鵠	鷺鷥于飛	166 の1	匪鸛匪鵒	弁彼鸛斯	交々桑扈	如暈斯飛	鸛鳴于九臯	航彼晨風	有鴝萃止	肅肅鵲羽	弋鳬與鴈
ブタ	ムクイヌ	ノロ	ヒツジ〔和名鈔〕			ムマ〔和名鈔〕	セキレイ	コウ	ミミヅク〔和名鈔〕 木兎〔日本記〕	モツ	ツ、ドリ カツコウドリ	カランテウ	ヲ、トリ ハヤブサ	サ、イ	サギ		カモメ〔万葉集〕	タカ〔和名鈔〕	オ、トリ	ヤマドリ〔和名鈔〕	アカマシラ	トビ	ワシ	ゼンジョウカラス	イカルガ〔和名鈔〕	シマキジ	ツル	サシハ		ノガン	マガモ
					右桂川國瑞所考載図説											寛政新元歲次己酉秋八月桂川國瑞之所考爰載													流離ノ条二出		

217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	巻5 蟲魚部	207	206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190	189
六月莎雞振羽	五月鳴蜩 如蜩如蜩	蜉蝣之羽	蟋蟀在堂	蒼蠅之聲	蟬首蛾眉	領如蝥蠩	躍躍阜螽	嘒嘒草蟲	蠡斯羽 読詠号		赤豹黃熊	獻其貔皮	有貓有虎	匪兕匪虎	母教猷升木	投畀豺虎	維熊維羆	象弭魚腹	呦呦鹿鳴	取彼狐狸	一之日于貉	有縣貍兮	竝驅從兩狼兮	有兔爰爰	羊牛下來	象之掃也	莫赤匪狐	有力如虎	于嗟乎麟虞
			ツ、レサセ キリクス〔古名〕	ハイ		サムシ スクモムシ	ヲホイナゴ	ツユムシ	キリギリス					サル	ヤマイヌ	クマ		シカ〔和名鈔〕	タヌキ〔和名鈔〕	ムジナ〔和名鈔〕		オホカミ	ウサギ	ウシ〔和名鈔〕	ゾウ	キツ子〔和名鈔〕	トラ		
	和名ハゴロモセミ				蟬ハセミナリ 蛾ハカイコノテウ也																								

246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236	235	234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218
鯉鱒鯉鯉	龍旅陽陽	鼉鼓逢逢	成是貝錦 錫秩百朋	戕電既厭	魚鱉膾鯉	南有嘉魚	魚麗于留鯉鯉	魚麗于留魴鯉	魚麗于留鯉鯉	九罭之魚鯉魴	必河之鯉	其魚魴鯉	其魚魴鯉	鱣鮪發發	魴魚頰尾	莫予荇蜂	卷髮如蠶	營々青蠅	為鬼為蜮	去其螟蟘及其蠹賊	螟蛉有子蜾蠃負之	胡為虺蜴	維虺維蛇	熠燿宵行	蟪蛄在戶	伊威在室	蜎蜎者蠋	蠶月條桑
ヤナギバハ	タツ〔古訓〕	カアイマン	タカラガヒ	カメ	ドウガメ	イワナ	ナマヅ			マス	コヒ	タナゴ		テウザメ	ヲシキウヲ	ハチ	ヤゴ サンリ				ジガバチ	トカゲ	マムシ		アシタカクモ〔和名鈔〕	ヲメモシ	クワノムシ	カヒコ〔和名鈔〕
								和産詳ナラズ舶来アリ 文化元年活鯉魚大小十余頭渡ル 鯉ヲハモト訓スルハ誤リナリ					未詳	安永八年己亥ノ九月阿州名東郡津田浦ニテ捕獲スル所ノザウザメ是ニ近シ				蒼蠅ノ条ニ出										